

レイクサイド マーダーケース (THE LAKESIDE MURDER CASE)

2004(平成16)年11月15日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督＝青山真治／原作＝東野圭吾／出演＝役所広司／薬師丸ひろ子／柄本明／鶴見辰吾／杉田かおる／豊川悦司／眞野裕子（東宝配給／2004年日本映画／118分）

……有名私立中学校への「お受験」をめぐる、塾の講師と3つの家族がくり広げるミステリーは、芸達者な俳優陣の勢ぞろいによってすごい映画に……。ストーリー展開に多少の不自然さはあるものの、状況設定や論点整理はさすが青山真治監督と感心させられるもの。それにしても最後はちょっとコワイよ……。

ベストセラー小説と青山真治監督そして芸達者な俳優陣

この映画の原作は、東野圭吾が2002年に書き下ろしたミステリー小説『レイクサイド』（実業之日本社）。名門中学校の受験を控えた4つの家族が勉強合宿に訪れた湖畔の別荘で起こる殺人事件をテーマにしたこの小説は、発売後たちまちベストセラーになったとのこと。

そんな原作を『EUREKA』（00年）で2000年カンヌ国際映画祭国際批評家連盟賞・エキュメニク賞をダブル受賞し、今や若手監督の旗手ともいえる青山真治監督が映画化したのがこの作品。この映画では4つの家族ではなく3つの家族とされているが、出演者は役所広司、薬師丸ひろ子、柄本明、豊川悦司と芸達者な俳優ばかり。そりゃ期待も高まろうというものだ……。

ややこしい家庭事情

この映画の主人公は並木俊介（役所広司）とその妻・美菜子（薬師丸ひろ子）。美菜子は前の夫との間に生まれた一人娘・舞華を連れ俊介と再婚したが、夫婦仲はうまくいかず、今や離婚寸前。その原因はこの映画からは明確ではないが、俊

介の仕事仲間であるカメラマン女性の英里子（眞野裕子）との不倫関係が1つの原因であることはまちがいない。そして美菜子も夫の不倫の事実は把握している様子。俊介はベッドの中で英里子と抱き合いながらも、舞華のことは愛していると話しているが、どうもこれはウソではなく本気のように。だから美菜子が狙う舞華の有名私学、修文館中学への「お受験」にはイヤイヤながらもつき合うことに。

浮気の後（？）、急いで駆けつけた湖畔の別荘ではすでに面接テストが始まっており、俊介はこれに遅刻。しかも、講師からの質問にロクに答えられない俊介はたちまちピンチに。そんな俊介に対して、2人だけの部屋に入った美菜子が言うのはグチばかり……。いくらお受験のために仲のいい夫婦を演じていても、それは所詮無理な話か……？

一種の密室殺人事件だが……

殺人事件の被害者となるのは俊介の愛人の英里子。英里子が「届けもの」にかこつけてわざわざこの湖畔の別荘までやってきたのはなぜか？ しかも書類を届けた後すぐに帰らず、夕食までつき合ったうえ、さらには湖の見物と称して近くのホテルに一泊することに……。こりゃ変だ。何か事件が起こりそう……。

根本問題は「お受験」！

殺人事件が起こるきっかけは「お受験」。近時有名幼稚園の「お受験」をめぐって、黒木瞳の娘と君島十和子の娘の話題が女性週刊誌の注目を集めたが、この映画の「お受験」は有名な私立の中学校。その中学校受験のために3つの家族が、塾の講師・津久見（豊川悦司）を招いて勉強合宿をやることになったわけだ。

その舞台となった湖畔の別荘は、医者藤間（柄本明）の所有物件。何とも豪華なものだが、そもそもこんなお受験のための勉強合宿ということ自体が、私に言わせれば異常そのもの。しかもその合宿で講師の津久見から面接の模擬テストを真面目に受けている藤間や美菜子の大学時代の友人・靖子（杉田かおる）や夫・関谷（鶴見辰吾）の家族（両親）を見ていると、思わず「お前らバカか！」と言いたくなってしまいが……。果たして今の世の中の基準や常識はどうなっているのだろうか？ それともひょっとして私の方が非常識……？

柄本の渋い演技に脱帽

3つの家族の中のキーパーソンは別荘の所有者である医者藤間。藤間はすでにかなり年をとっている医者だから、なぜその一人息子が中学受験という年齢なのか少し不思議だが、それは医者稼業で稼ぐのに忙しかったため晩婚だったのかもしれないし、なかなか子供が生まれなかったのかもしれない。それは家庭の事情……？

血を流して死んでいる英里子を取り囲んで藤間夫婦と関谷夫婦そして美菜子が応接間に集まっている中に帰ってきた俊介に対して冷静に状況を説明しているのが藤間なら、ここで英里子が死亡したことになるのはまずいから英里子の死体を処分し、殺人事件はなかったことにしようと提案したのも藤間。もちろん俊介は「そんなバカなことができるか！」と反論したが、藤間の意見に同調していく他の5人の前に俊介もやむなく……。

この議論内容(?)とその結論にはかなり不自然さがあるが、何となくミステリー含みであることを前提とすればよしとすべきか……？

このように、物語を進めていくキーパーソンは藤間だから、藤間はこの映画では陰の主演とも言えるべき存在。そして芸達者な柄本はこんな藤間を見事に演じている。

医者の藤間はちょっと怖い……？

死体処分の具体的方針を示すのはもちろん藤間。そしてその指示は医者だけにすごく具体的。すなわち指紋を消すために指先をライターで焼いたり、身元を隠すために下着に至るまですべて衣服をはぎ取ったり、果ては、念のために(?)顔をぐちゃぐちゃにするべく石で殴打したり、そりゃひどいものだ。これは証拠隠滅罪の他、死体損壊罪に該当する行為であることは明白。こんなに冷静にこんなに冷酷な行為を平気でできるのは、長年医者稼業をやってきたからだと考えると、医者という仕事そのものがちょっと怖いような気がするが……。

薬師丸ひろ子もいい味を

英里子と不倫をしていたことが原因で勉強合宿の場で英里子が自分の妻の手によって殺されるという最悪の事態になりながらも、ひとり正論を吐く俊介が浮いた存在となるのは当然だが、そんな役柄を例によって役所広司は好演。

また、人格的にひねくれたところのあるニヒルな塾の講師・津久見を「この役は俺のもの！」とばかりに豊川悦司がピッタリの好演技。

この2人の芸達者ぶりは当然だが、ビックリしたのは薬師丸ひろ子の好演。『野生の証明』（78年）でデビューした薬師丸ひろ子は、『セーラー服と機関銃』（81年）、『Wの悲劇』（84年）が強く印象に残っているものの、最近はどうもあまりパツとする作品がなかった。しかしこの映画では見事に演技派女優としていい味を見せている。

お受験のための合宿の場にこともあろうに夫の愛人が訪れてくるという状態の中で、夫との対話や口論そして殺人事件の発生とその後始末、さらにラストでは……？ こんな複雑な役柄を、大勢の演技派・実力派俳優に混じって堂々と演じている。丸々とした愛嬌のある顔だけが魅力（？）の女優ではないことを、この映画を観て再認識！

ラストシーンはかなりショッキングだが……

殺人事件の処理と真相解明（？）が終わった後、俊介と美菜子夫婦はどのような行動をとったのだろうか？ 愛娘・舞華のお受験はどうなったのだろうか？ それについてのこの映画の結末は、私には少し甘すぎるように思えるもの。青山真治監督の作品であれば、もう一工夫してほしいという思いが強い。映画のラストシーンにおいてスクリーンには2種類の極端に異なった英里子の姿が登場するが、その1つはかなりショッキングなもの。そのショッキングなラストシーンのために、この映画はR15指定になったのだと思うが、私にはこのようなラストへの持っていくき方はどうも疑問。あなたはどう思う？

2004(平成16)年11月16日記